

いま、なぜ、紅梅文庫旧蔵本なのか

上野英子

【要旨】

紅梅文庫旧蔵本は三条西実隆の手沢本だった（文明本）の流れをくむ写本であり、同本によって、当時の実隆本の具体相が推測できる。よって従来は実隆初期の青表紙本とされてきた宮内庁書陵部蔵本であるが、同書は実隆協力本であったことを示し、室町時代を席卷した三条西家の本文史を論じる際、その劈頭には、書陵部本ではなく紅梅文庫旧蔵本をおくべきこと等を論じた。

紅梅文庫旧蔵本源氏物語（以下、紅梅文庫本と略）は、室町時代後期における源氏学を牽引した三条西実隆の手沢本だった〈文明本〉の転写本の流れを汲む写本である。たかだか室町時代に書写された、しかも転写本に過ぎない一本に対して、どうして「いま、なぜ、紅梅文庫本なのか」などといった大仰な問いかけをしているのか。以下、三つの事柄を説明していくことで、その理由を明らかにしたい。

（一）実隆最初の手沢本である〈文明本〉について

（二）紅梅文庫本がその転写本の流れを汲むことについて

（三）かかる紅梅文庫本を通じて新たに見えてくるものについて

これらは既に報告してきたものであるが^{（一）}、今回報告書を作成するに際しては、あらたに概要をまとめつつ、若干の訂正・補足を加えておいた。

一、文明本

三条西実隆の日記『実隆公記』（以下、『公記』と略）は、実隆が二十歳を迎えた文明六年（一四七〇）元日の出仕記事から始まっている。都を戦場として、およそ一〇年の長きにわたって繰り広げられた応仁の乱がようやく終熄へと向かっていった頃である。

同じ頃、朝廷では戦禍で壊滅的な打撃をうけた禁裏御文庫の復旧を果たすべく、所謂文明年間の〈古典籍復興運動〉を始めていた。この運動には、鞍馬の疎開先を引き揚げて帰洛し、侍従として出仕し始めた若き日の実隆も精力的に参加していたようで、『公記』には公武からの依頼による古典の書写・校合・加点等の記事が目立つ。井上宗雄氏が説くよ

うに^{（二）}、実隆古典学の基礎はこうした運動から形成されていたのだろう。そういう意味では三条西家の源氏学は応仁の乱の焼け跡のなかから生まれたといっても過言ではないようである。

さて『公記』でみる限り、実隆は生涯にわたって少なくとも四度、自身の手沢本となる源氏写本を作成していた。これら四本をそれぞれの作成年次から〈文明本〉〈永正本〉〈大永本〉〈享禄本〉と仮称するならば、最後の〈享禄本〉が現行の日本大学総合図書館蔵三条西家証本源氏物語（以下、日大本と略）である。なぜ四度も手沢本を作成したかといえば〈享禄本〉以外の三本は経済的な理由から売却せざるを得なかったからである。実隆が東宮時代から近侍していた後柏原天皇でさえ、資金不足から、踐祚後実に二二年目にしようやく即位の礼を挙行できた、そういう時代であった。実隆が三度にわたって自身の源氏写本を売却したことよりも、売却しても直ぐにまた新たな源氏写本を作成していった、彼の熱意に注目したいと思う。

実隆が初めての手沢本を完成させたのは、文明十七年（一四八五）三十一歳の時であった。同年閏三月二十一日の条によれば、

源氏物語五十四帖書写功、今日終之。周備千万自愛者也。及晚宗祇・肖柏等来。歌道清談頗有其興。^{（三）}

とある。そしてこの〈文明本〉を手放したのが、永正三年（一五〇六）八月二十二日のことで、当日の記事には、

抑源氏物語愚本（一筆書之、銘後成恩寺禪閣筆）随分雖秘藏之本、甲斐国某所望、黄金五枚（代千五百疋）出之乞取之間遣之。則又源氏本（七帖不足）召置之。値四百五十疋也。兩条共玄清法師媒介也。

とある。これによれば、〈文明本〉は実隆が五十四帖を一人で書写したもので、銘は「後成恩寺禪閣」(一条兼良)の筆だったようである。そして〈文明本〉売却金の一部で、二番目の手沢本となった〈永正本〉の中核となる四十七帖を購入していたことも判る。

完成から売却までの二十一年もの長きにわたり、実隆は〈文明本〉を用いていたことになるのだが、その間における彼の源氏関連事跡は、およそ以下のようなものだったと思われる。

(イ) 講釈受講時に自身のテキストとして利用したろうこと

〈文明本〉成立の一週間後、実隆は宗祇や肖柏を自宅に招き、彼らの源氏講釈を受講した。文明十七年閏三月二十八日から翌年六月十八日まで続き、実隆にとっては源氏研究の基礎となった講釈である。期間中、宗祇と肖柏はそれぞれの源氏本を持参して講義に臨み、実隆もまた自身の〈文明本〉を以て受講していただろうから、この講釈を通じて、それぞれの源氏本文の異同等などにも気がついていったことだろう。とはいえ、実隆は、かつて河内守父子が試みた如き大がかりな対校作業を行っていたわけではあるまい。講釈のねらいはあくまでも、源氏物語の読みとりにあつたと思われる。

(ロ) 「青表紙正本帚木」との校合を書き加えたりしたこと。

日記に拠れば、文明十九年(一四八七)三月三十日、実隆は宗祇の持参した「青表紙正本帚木」を閲覧し、一晚借りたのだらう、翌日に校合を終えたとある。「校合」と明記されている以上、その結果は記録されたことだろう。〈文明本〉に書き入れたのではあるまいか。

(ハ) 宮中での源氏講読の際に持参し、読み上げたりしたこと。

延徳二年(一四九〇)正月から翌年十月まで、実隆は勅命をうけて宮

中で源氏講読を行った。初回に先立ち、自邸に宗祇を招いて予行演習を行うという慎重ぶりである。宮中の人々の間に実隆の源氏解釈と彼の源氏本文〈文明本〉の存在が知れ渡っていったものと思われる。

(ニ) 源氏系図や注釈書など作成時の依拠本文となったこと。

実隆がまとめた『源氏物語系図』四種のうち、長享二年(一四八八)本・明応八年(一四九九)本・文亀四年(一五〇四)本の三種は、いずれも〈文明本〉時代の編集である。また肖柏の聞書をもとに、第一次『弄花抄』(散逸)を編集していた期間も同様である。いずれも〈文明本〉を依拠本文としていたものと思われる。

(ホ) 転写を許可したこと

源氏学者としての評判が高まるにつれ、源氏写本の作成依頼も増えていった。なかには寄合書きへの参加依頼や、〈文明本〉を転写するための一部貸出の依頼などもあつた。そのなかで少なくとも次に挙げる二本の場合は、全冊転写されたようである。

・ 明応四年(一四九五) 六月に伏見宮邸にて完成した「上藤局本」

・ 明応五年六月(翌年正月)に作成された「姉小路本」

このうち伏見宮家の「上藤局本」を転写したのが、本稿で言う紅梅文庫本である。また「上藤局本」の少なくとも一部は、実隆の〈大永本〉作成時に、「姉小路本」の一部は、〈享禄本〉制作時に、それぞれ三条西家に貸し出されている。どちらの場合も、実隆は売却してしまった〈文明本〉の本文を、転写本を通じて再利用しようとしたものと思われるのであつて、実隆にとって〈文明本〉というものはそれだけ愛着の深い本文であり、その転写本を通じて、〈大永本〉や〈享禄本〉にも大きな影を落としていったと位置づけることができよう。かかる〈文明本〉を祖本としているの

が、次に述べる紅梅文庫本である。

二、紅梅文庫本

書名は、該書に押された前田善子氏の蔵書印（「紅梅文庫」）による。室町後期の写本（五十二帖。蓬生・若菜上欠、総角は元禄十三年の補写）で、夢浮橋巻の奥に

本云

此物語五十四帖以待従大納言実一卿

自筆本上臈局〈法雲院／左大臣女〉手自被書

写者也 深秘不可遣他所而已

明応四年六月一日

李部王判

という本奥書がある。明応四年（一四九五）六月一日に記された「李部王」（伏見宮第五代当主、邦高親王）によるもので、底本は「侍従大納言実一卿自筆本」とあるので実隆の自筆本、つまり〈文明本〉であった。既述したように、延徳年間に実隆が宮中で源氏講読を行っていたこともあって、〈文明本〉に関心が寄せられていたからだろう。そして書写担当者は伏見宮家の「上臈局」（今出川教季女）。「手自被書写」という表現から推すに、教季女は全冊一人で書写していたらしい。彼女にとって、当主の第一皇子で、のちに第六代当主となる貞敦親王を出産してから七年目の出来事となる。

一方、『公記』にはこれに呼応する記事として、奥書の日付より六日遅れとなる二十八日条に、

伏見殿上臈源氏本五十四帖銘、今日染筆。

とあり、実隆は伏見宮家の「上臈源氏本五十四帖」のために「銘」（題簽）を揮毫していたのであった。これは邦高親王の依頼によるものか。親王は、実隆自筆本を書写してようやく完成した写本だけに、記念として実隆の銘を希望したのだろう。そして奥書に「深秘不可遣他所而已」と命じた。どうやらこの本は上臈局個人のものというよりは、伏見宮家の本として作成されたようである。

そして現行の紅梅文庫本であるが、同本奥書の肩付きに「本云」とあることから、上臈局本そのものではなく、転写本ということになる。転写の日付はない。とはいえ、紅梅文庫本の書写年代はどうみても室町後期であって、近世まではくだらないのではないかと思われた。なぜなら総角巻一帖だけが近世（元禄十三年）の補写本なのだが、この総角と比較すると他の諸帖は、表紙・綴じ糸・本文料紙いずれも少し古びているからである。

ともあれ、紅梅文庫本は〈六半本〉の列帖装。片面行数（十行）も、和歌の書き方も統一されており、後遊紙の枚数にも無駄が無い。おそらく紙型や片面行数などは底本（上臈局本）の書式通りに書写したのである。その書影をみるに、補写本以外は全冊一筆で、丁寧な女筆のようである。伏見宮家で作られた〈上臈局本〉の複本だった可能性も考えられる。

ことほどさように、伏見宮家には〈文明本〉を転写した〈上臈局本〉が存在していたのだが、それに関連して『公記』には〈文明本〉を売却した後の実隆が、伏見宮家から源氏本を借用し書写したという記事が散見する。例えば次の通り。

永正九年（一五二一）

六月十二日 伏見殿南御方、源氏本申出之。十帖給了。

六月十三日 源氏今日立筆。

これは実隆が〈永正本〉を所有していた時期の記事である。二度目の手沢本を所持していたにもかかわらず、実隆は「伏見殿南御方」に源氏本を申し出て、十帖ほど借りて翌日から書写を始めている。中城さと子氏のご教示に拠れば、ここである「南御方」とは今出川教季女を指すという。「南御方」の呼称は伏見宮家では一番の上席にあたる名称のようにだが、前代の「南御方」(邦高親王実母、庭田重有女)が延徳三年(一四九二)に物故したこともあって(『公記』)、今度は嫡男の母である教季女が新たに「南御方」と呼ばれたのだろう。永正六年(一五〇九)、嫡男貞敦親王に入室した三条実香女が「上臈局」と呼ばれているからである⁽⁴⁾。よって実隆は、既に売却してしまった〈文明本〉の転写本である伏見宮家の十帖を、わざわざ借りだして書写したことになる。永正十一年(一五二四)三月二十七日条に「三亜等源氏書写。花散里巻、予書写。即須磨卷立筆。」とあるのは、その続きだろうか。だが三年もたつて第十一巻目の花散里を書写したというのも、間隔が空きすぎているようである。

なお『細流抄』の公条奥書に「永正十年受庭訓畢」とあることから、伊井春樹氏はこの時期、実隆は公条に源氏講釈を施していたろうとする⁽⁵⁾。すると実隆が伏見宮家の源氏本を転写したのは、永正十年の講釈と関係があるのだろうか。例えば講釈の機会を利用して、以前の手沢本と現在の手沢本とを比較してみようといった試みである。だが残念なことに、永正九年七月以降、同十六年まで『公記』には欠損部分が多く、

あつても断片的な記事が続くため、詳細は不明である。

そして八年後、実隆は再び伏見宮家の「南御方本」(すなわち「上臈局本」)を借りだした。関連するとみられる記事を『公記』から抄出してみる。

永正十七年(一五二〇)

二月九日 万葉本・源氏本等遣良椿許。及昏良椿来、本事有示旨。

三月七日 源氏愚本今日遣良椿。能登守護平所望之儀也。秘藏雖惜、千万無力者也。

三月十七日 源氏料紙且到来。則申出伏見殿南御方本、今日帶本卷書始了。

三月十九日 源氏物語、帥、西室今日書始之。

三月二十一日 召了椿、料紙事等申付之。

四月三日 源氏料紙到来。

四月六日 帶本終功 桐壺卷立筆。

四月十七日 源氏本返進伏見殿。又申請之。

大永元年(一五二一)

十月十一日 今旨 源氏表紙事申付。百疋遣之。

十月十六日 源氏本悉出現。自愛く。

十月二十二日 召大工令作源氏箱(稿者注) 同二十三日箱完成

十二月二日 源氏箱、外居等令塗之。

この一連の記事は、永正十七年三月七日に出入りの経師良椿を仲介として〈永正本〉を売却した後、大永元年十月十六日に三度目の手沢本となった〈大永本〉を完成させるまでの経緯を抜粋したものである。売却後十日目にあたる十七日条に「源氏料紙且到来」とあるのは、次の手沢

本を作るための料紙が到着したという意味だろう。〈永正本〉作成時には〈文明本〉売却金の一部で源氏写本四十七帖を購入し、不足分を補った実隆だったが、今回は自ら書写しようと決心したのだろう。しかも同日中に借用を申し出ていた「伏見殿南御方本」を帚木巻から書し始めたところ。

永正九年時に全冊書写していたのであれば、今回改めて借り出す必要は無かつたろう。するとやはり前回は〈永正本〉と〈文明本〉の本文を比較するための、サンプル調査のようなものだったのだろうか。

また今回実隆は、桐壺からでは無く、帚木巻から着手した。推測するに、実隆にとって〈文明本〉の一番の売りは「青表紙正本帚木巻」との校合結果を書き入れた帚木巻であり、それがこの転写本に忠実に反映されているかどうか、気がかりだったからではあるまいか。十九日には公条や公順らの助勢も得た。書写者が増えて料紙が不足してきたのだろう、二十一日に良椿に料紙を追加注文。翌月三日に届いたので六日に桐壺を立筆。こうして伏見宮家に借りた巻々を書写し終えたので、十七日にそれらを返却すると同時に次の借用分を申請したということなのだろう。その後の記事は見えないため、実隆が伏見宮家本を全冊借用したのかは不明である。ともあれ、翌年十月に百疋で源氏表紙を発注したとあり、十月十六日条に「源氏本悉出現、自愛く」とあるので、おそらくこのあたりで全冊完成したものと思われる。実隆にとって三度目の手沢本となった〈大永本〉の誕生である。

この本もやがて売却されてしまうのだが、現行の日大本の桐壺・帚木・空蟬には、大永五年（一五二五）年の六月と八月の公条による書写奥書がある。おそらくそれらは、公条自身が写した〈大永本〉の一部で、〈大

永本〉売却後も公条の転写本が残っていたため、〈享禄本〉作成時に利用されたものと思われる。

なお齊藤鉄也氏の *Ngram* を用いた表記からみた統計調査に拠れば、日大本は、これら三帖に夕顔巻を加えた四帖が、紅梅本の本文とかなり親しく、共通の親本を持つと認められる程度に本文が類似しているという。さらにこの四帖ほどでは無いが、日大本のなかの一四帖もまた紅梅本と本文が類似することである。^⑥

三、紅梅文庫本を通じて新たに見えてくること

【書陵部本の位相】

紅梅文庫本の存在意義は、今は散逸した〈文明本〉の概要が、同本によって明らかになるという点にある。それが判明する以前は、〈享禄本〉（すなわち、現行の日大本）以外の実隆手沢本が悉く散逸していたこともあいまって、実隆の源氏物語本文を論じる際には、主に宮内庁書陵部蔵本（以下、書陵部本）と日大本とが、採り上げられてきたのだった。周知のことではあるが、この二本について少し確認しておこう。

まず書陵部本だが、同本には次のふたつの奥書がある。

此物語五十四帖以青表

紙証本書写校合銘是

当代宸翰也殊可謂珍奇

可秘藏々々

権大納言藤実隆（花押）

（桐壺巻）

此物語以青表紙

証本終全部之書

功者也

聖槐下拾遺小臣（花押）

（夢浮橋卷）

「以青表紙証本」とある奥書は無論のこと、各冊に校閲者実隆の花押があり、篝火巻は実際に実隆の書写であり、しかも当代宸翰の銘まで備えていることから、該書は実隆が権大納言時代に作成した三条西家の証本だろうとされ、岩波日本古典文学大系（旧大系）の底本にも採用されたのであった。

一方の日大本には

享祿四年正月廿二日終書写之

功者也

槐陰逍遙叟堯空

（夢浮橋卷）

等の書写奥書があり、出家後の実隆晩年（七十七歳）の書写であることが判る。また本奥書や書写奥書などから、底本は取混ぜ本である。そのひとつが「夢庵所持之古本」（『公記』）だったようで、日大本花宴巻に

本肖柏等

以京極黃門（定家卿）自筆校合畢（十六枚）

という本奥書があり、それに続けて実隆の

享祿三年正月十九日書写了

奥入以別紙写之（二月廿八日一校了）

桑門堯空（七十六歳）

という書写校合奥書のあることから、少なくとも日大本花宴巻の底本は、定家自筆本との校合を経た肖柏所持の写本であり、かつ巻末に奥入を有した写本だったことが判る。この日大本は『大成』に校合本（略号「三」）

として採用されている。

さてこの書陵部本と日大本、前者は権大納言時代の三条西家本、後者は晩年になってからの三条西家本とみなされ、共に実隆の青表紙本とみなされてきた。しかしその後の調査で

（a）どちらも、池田亀鑑氏が青表紙原本と認定した（四半本）四帖（柏

木・花散里・行幸・早蕨）との親近度は、大島本に及ばないこと。

（b）いずれも、一部に河内本系の本文が紛れていること。

（c）書陵部本の場合は、河内本系の巻（玉鬘・匂兵部卿）や、別本の

巻（須磨・梅枝・柏木・宿木）まで含まれていること。

等が明らかになると、青表紙本としての純度というものを考えてみた場合、換言するならば、池田亀鑑氏が青表紙原本と認定した（四半本）との親疎関係からみて、三条西家本は大島本には及ばないことが明らかになった。就中書陵部本については、大島本と大きく乖離した部分が目立ち、かかる本文に「以青表紙証本令書写校合」と揮毫した実隆の見識そのものに対する不信感さえ生じていったようである。例えば阿部秋生氏は書陵部本について、次のように解説している。

その本文は、いわゆる伝定家本をはじめとする鎌倉期書写の青表紙本とはかなり距離のあるもので、むしろ室町期書写の青表紙の本文に近く、現象的に言えば、河内本に一段と近い形を往々にしてみせる本文である。：（中略）：定家の作った青表紙原本の意ではなく、実隆が認めた「青表紙証本」、即ち三条西家の家の「証本」の意であろうと思われる（7）。

しかし稿者は、実隆が自身の手沢本として作成し、三条西家で実際に用いられてきた本文の系譜（仮に、狭義の三条西家本とする）から、この書陵部本は除外すべきだと主張してきた。理由は以下の四点である。

第一に、書陵部本に三条西家の蔵書印は無く、現行の蔵書印は書陵部の印のみであること。また書陵部本は豪華な装丁で、全冊見事なまでに書式が統一されており、実隆が奥書の署名に「垂槐下拾遺小臣」（夢浮橋）と謙称していること等から、貴顕に献上するために作成された写本とみられること。

第二に、書陵部本は寄合書きで、実隆も篝火巻を担当している。その際彼は〈文明本〉を書写していたことが、紅梅文庫本との比較によって判明した。一方他の巻々もそうなのかといえば、河内本系とされる玉鬘・勾宮や、別本とされる須磨・梅枝・柏木は無論紅梅文庫本とは全く異なっている。つまり書陵部本は実隆の〈文明本〉をもとに全冊書写されたものではなく、様々な底本をもとにして作成した取り混ぜ本だったということである。

第三に、ではどの巻にどの写本を充てるかといった底本の選定を実隆が行っていたかといえば、どうもそうとも思われない。なぜなら〈文明本〉のなかでも実隆が最も自負していたのは、宗祇持参の「青表紙正本帚木」との校合結果を書き入れた帚木巻だったろうから、仮に底本の選定が実隆に任されていたのなら、帚木には当然〈文明本〉を用いたと思われる。しかし実際には紅梅文庫本との本文異同があつて、〈文明本〉が底本とは判定できないからである。

第四に、書陵部本には全冊に校合を終えたという実隆の花押が押してある。では実隆は各巻担当者の許から戻ってきた清書本を、全冊〈文明本〉

で校合し訂正したのだろうか。だが紅梅文庫本と本文異同のみえる箇所でも書陵部本には何も記されておらず、この仮説は成り立たない。おそらく実隆は寄合書きの参加者たちがそれぞれの底本通りに書写しているかを確認したのだろうと思われること。

ことほどさように、書陵部本は貴顕に献上するために作成されたものであり、そこに実隆の主體的な関与は見出し難いのである。確かに実隆は篝火巻の書写を担当し、全冊校訂し、奥書を起草した。だがそれは命じられてのことだったのではあるまいか。奥書に「以青表紙証本令書写校合」と揮毫したのも、発起人や底本提供者らへの配慮が働いてのものだったろうと思われる。よって書陵部本は〈狭義の三条西家本〉の系譜からは除外して、むしろ〈実隆協力本〉として位置づけるべきであり、三条西家における青表紙本文の生成史の冒頭には、散逸した〈文明本〉の代わりとなる紅梅文庫本を置いて再検討してみるべきだと思うのである。

なお齊藤鉄也氏の「Nagataを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付けの調査」によれば、紅梅文庫本・書陵部本・保坂本・大正大学本・日本本・池田本・大島本のうち、「大島本・書陵部本・大正大学の三写本がグループを構成することが、他の写本のグループと比較して多いことが明らかになった」という⁽⁸⁾。

次の図がその結果を稿者なりにまとめたものである。但し注意したいのは齊藤氏の「Nagata」が本行のみを扱っている点である。そのため本文訂正や異文注記・傍注等の書き入れの多い写本については、統計結果の

町期の写本とは一体どんな写本だったのかという問題に、解決の糸口を与えてくれるものではないか。

また大正大学本は、実隆が奥書を起草した（実隆協力本）である。参考までに、書陵部本・大正大学本・大島本を中心とした関係年表を掲げておく。

表記上からみた大島本の本行は、書陵部本・大正大学本に近い

訂正加筆以前の大島本に近い本文はどれか

宮河印の有無とは無関係か。

諸本名	表記からみて大島本（本行）と本文が似てゐる巻番号
紅梅文庫本	17・18・19（3帖）
書陵部本	09・14・16・17・18・20・25・26・28・34・35・37・40・44・45・46・52（17帖）
保坂本	
大正大学本	27・29・06・14・16・17・18・20・28・34・35・40・44・45・46・47・50（17帖）
日大本	05（1帖）
池田本	05（1帖）
朱文字：特に親しい、下線部：宮河印	
齊藤鉄也「Ngramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本源氏物語」の位置付け(2)―書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本を中心とした写本との比較を通して―(2022年3月：文芸資料研究所「年報」41号)	
仮名字母の出現傾向を用いた大島本源氏物語の調査2019年12月「人文科学とコンピューターシンポジウム」	

書陵部本・大正大学本・大島本（本行部分）			
和暦	西暦	関連事項	
文明13年	1481	飛鳥井雅康、大島本「関屋」書写	大島本中に「関屋」と同筆の可能性をもつ帖は少ない（齊藤説）
文明17年	1485	実隆、〈文明本〉を完成	
文明18年	1486	8/4 実隆、宗祇新写源氏本の外題54帖分を染筆 10/2～長享3年 実隆、「親王御方本」の作成に尽力	〈文明本〉と書陵部本との関係は薄い
文明19年	1487	実隆、宗祇持参「青表紙正本帯木」を披見・校合	
延徳元年	1489	実隆、権大納言に昇進	書陵部本
延徳2年	1490	(～明応3年1493) 大正大学本、書写奥書（寄合書・青表紙本）	
永正3年	1506	2/5 実隆、内大臣に昇進 8/22 実隆〈文明本〉を売却。閏11/21（永正本）を揃えたか	大島本「若菜下」の底本は書陵部・大正本の類。後に定家自筆本系によって訂正（加藤説）
永禄7年	1564	吉見正親、大島本54帖揃（桐壺・夢浮橋の書写を、道増・道澄に依頼）	

解析にかなりの注意が必要なようである。ことに多くの書入れ修正によって定家自筆本に近づいたとされる大島本の場合、Ngramによる統計結果は、これまで周知の事実とされてきた同本の位相とは、かなり異なる結果がでてきた。だがこのことは、訂正加筆以前の大島本の説明、加藤洋介氏の説をかりれば⁽⁹⁾、大島本が最初に底本としたであろう室

稿者は室町後期における源氏学を牽引した三条西家の人々が、「当流の本」として用いていた青表紙本は、定家の〈四半本〉ではなく、もうひとつの定家本とされている〈六半本〉の流れを汲むものでなかったかと推論している。例えば、紅梅文庫本すなわち実隆の〈文明本〉が、藤原定家の〈六半本〉に最も近似していたとの調査結果は既に発表した⁽¹⁰⁾。また青表紙本を標榜する三条西家に於いて、彼らの作成する源氏本の書型は六半であったし、〈享禄本〉に至っては、わざわざ奥入を別冊仕立てにしていた⁽¹¹⁾。定家の青表紙証本は阿仏尼によって奥入が切り取られてしまったと解釈していたからである⁽¹²⁾。これなども、三条西家の人々が定家の〈六半本〉をこそ青表紙証本と捉えていた影響と思われる。

室町期の源氏諸本の中で、実隆書写、実隆奥書、実隆外題等の写本は複数あり、それらの多くは三条西家本として処理されがちである。だが当時の状況、すなわち取混ぜ本を寄合書きで作成することが多かった室町時代の源氏写本作りや、揮毫依頼が貴重な収入源となっていた公家たちの台所事情、源氏学の権威としての実隆の影響等々を勘案するならば、実隆書写本の底本（あるいは実隆校合本の校合本）が実隆の手沢本だったとは限らず、奥書を起草したからといって必ずしも当該写本作成の責任者だったとも限らないことは明らかだろう。それらを曖昧にしたまま、三条西家本として一括りに議論することは、徒に混乱を招くだけではないのかと危惧されるのである。まずは三条西家内部で作られていった本文（狭義の三条西家本）と、書写・校合・奥書などで実隆が協力した本文とを分けておくこと。その上で、狭義の三条西家本の実態はどういうものだったのかを明確にしておくことが先決であり、そのためにも紅梅文庫本は散逸した〈文明本〉の代替として、三条西家における

本文史研究の始発部分に置くべき資料と思われる。

注

- (1) 拙稿「三条西家源氏学における本文形成史(一)」(二〇一六年三月、実践女子大学文芸資料研究所「年報」三五号所収)、「ふたつの定家本源氏物語と三条西家本」付、実隆文明本の転写本としての紅梅文庫旧蔵本紹介」(二〇一七年三月、同「年報」三六号所収)、『源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相——』(二〇一九年、武蔵野書院)
- (2) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』
- (3) 引用は『実隆公記』(昭和五十四年第二刷、続群書類従完成会刊)によった。なお割注部分はへゝ印で示し、私に句読点や傍線を補った。以下同様。
- (4) 中城さと子「上臈局と南御方は同一人物か否か」(本誌掲載)
- (5) 永正十年度の実隆講釈について、『公記』によれば、「源氏講釈始之。自七月二七読之」(永正十年六月十七日)、「源氏講釈再講」(初音卷)」(永正十一年二月十二日)、「源氏講、典厩、畠山次郎」(初来、携太刀、翌日遣太刀了)」(同十七日)、「源講、大内五郎来」(同年三月二日)等とある。講筵には、細川・畠山・大内といった武家たちも参加していたようである。また宮川葉子氏『三条西実隆と古典学』(平成七年、風間書房)によれば、『再品草』の記事から終了は永正十一年十一月十九日だったようである。
- (6) 齊藤鉄也「Ngramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付けの調査——書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本、日本本、池田本、大島本を中心とした写本との比較を通して——」(本誌掲載)
- (7) 阿部秋生「底本・校合本解題」(昭和五十四年、小学館『日本古典文学全集 源氏物語 卷六』四〇六〜七頁)。
- (8) 注6参照。
- (9) 加藤洋介「大島本源氏物語の本文成立事情——若菜下巻の場合」(二〇〇九年 和泉書院『大島本源氏物語の再検討』二〇六頁)。
- (10) 拙著『源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相——』(二〇一九年、武蔵野書院) 八九頁。
- (11) 『公記』大永三年六月一〇日条によれば、〈大永本〉の転写本を所望した粟屋元隆のため、まずは「奥入一冊」等を送ったようである。また享祿四年四月十三日条によれば、〈享祿本〉においても経師に「奥入」表紙を作成させるべく送ったとある。
- (12) 『孟津抄』『岷江入楚』『源氏弁引抄』には「三光院内府」(三条西実枝)談話として阿仏尼が奥入を切り離した逸話が採り上げられている。